

死神のメルヘン

—グリム童話と日本の落語—

はじめに

筆者は、駿台予備学校で数学を教えているが、一方で、メルヘンやナンセンス童話の創作に取り組んでおり、いくつかの作品集を出版したりしている。読む本も、文学、芸術関係書が多いが、この分野について、個人的には、自宅で談話会を開く等はあるものの、残念ながら、教壇では、ほとんど、語る機会がない。そんな中、今回は、この貴重な紙面を利用して、メルヘンについての、筆者の最新の研究成果を披露させていただくことにしたい。今回のテーマは、グリム童話の「死神の名づけ親」と、落語「死神」の関係を中心とした、死神メルヘンの伝播であり、そこには、ナンセンス童話の精神の原初が見られるし、また、貪欲とも言えるほどの外国文化の受容という、日本文化の特徴を見ることができ、が、なによりも、従来の通説を検証することを通して、間違っ

た説が、どのようにして生まれ、どのようにして広まっていったかが明らかになってくる過程を、是非、味わっていただきたいと思っている。

北村 正裕

グリム童話「死神の名づけ親」

まず、グリム兄弟がドイツに伝わる昔話を記述して作った「グリム童話集」(決定版 一八五七年)の四四番の物語「死神の名づけ親」は、次のような話である。

貧乏な男が、子どもの名づけ親をたのむ金がなく困っていたが、名乗り出た神様を、貧富の差別をするという理由で断り、その公平ゆえに、死神を名づけ親に選ぶ。子どもが大きくなると、その名づけ親の死神が、子どもに、名医になるための秘訣を教える。死神が病人のあたまの方に立っていたら病人は助かるが、足の方に立っていたら助からないというの

だ。名づけ子は、たちまち、見立てのうまい医者として成功して、金持ちになるが、ある時、病人の上下を置き換えて、助からないはずの病人を二度も無理やり助けたため、怒った死神に、無数のろうそくに人の命の灯がともる洞窟に連れていかれ、病人に寿命を譲ったために短くなって消えそうになっっている自分のろうそくを見せられる。死神は、名づけ子の懇願に応じて、消えかかっている灯を新しいろうそくに移すふりをするが、わざとしくじって、灯は消え、名づけ子は死ぬ(文献(金田))。

これが、グリム童話「死神の名づけ親」(原題“Der gevatte Tod”)のあらすじだが、冒頭の、死神が選ばれる論理がむしろ、神という最高の価値があつさり否定されるところが痛快である。死神が身近な存在になっているところもむしろ、中でも、一度は、死神をあざむいて、死ぬはずの病人を助けるところは、因果律の転倒であって、ろうそくの灯に支配されているはずの人間の運命への反逆であり、ナンセンス童話としての味わいがある。「死神」という概念は、もちろん、キリスト教という一神教がヨーロッパ文化を支配する以前の多神教の時代に生まれたものであろうが、キリスト教の時代のはずのグリムの時代に、なお、この

ような話が、民衆の間で語られていたという事は、注目に値する(註一)。一神教たるキリスト教も、たてまえにすぎないという事なのか。「信じる」という言葉の意味についても考えさせられる。一神教の否定というのは、ヨーロッパにおいては、考えようによつては、あらゆる社会的価値観の否定でもあり、これこそ、ナンセンス童話の本質である。ところが、これとそっくりな日本の落語が存在する。

落語「死神」

落語「死神」は、台本があるわけでもなく、演者によって、様々なヴァリエーションがあるが、まず、比較的正統的と思われる(円朝)のテキスト(二代目三遊亭金馬の口演の記録)に基づいて紹介しよう。

貧乏な主人公の男が、子の名づけ親をたのむ金がなく、困っていると、死神が現れ、医者になって金儲けをしろという。死神が言うには、死神が病人の足元にいれば病人は助かるが、頭の方にいたら助からないという。おかげで、男は、たちまち、見立ての良い名医となるが、ある時、病人の上下を置き換えて、助からないはずの病人を無理やり助けた

ため、怒った死神に、無数のろうそくに人の命の灯がともる洞窟に連れていかれ、病人に寿命を譲ったために短くなって消えそうになっている自分のろうそくを見せられる。男は、寿命をのばすために、自分のろうそくに新しいろうそくを一つごととするが失敗して死ぬ。

以上が、金馬の口演速記のあらすじであり、(今村)(今村二)(富田)(三二)(名人)もほぼ同じ。(落協)(飯島)では、「名づけ親」の語は全く出てこないが、(飯島)に収録されている飯島氏との対談の中で、六代目三遊亭円生が「死神は男の名づけ親なんです」と語り、二代目三遊亭金馬が演じていた古い形では、先に紹介した形であったと述べている。「名付け親」(ドイツ語では“Gevatter”)の習慣が一般的であったのは、ヨーロッパの話であり、例えば、チャイコフスキー作曲のバレエ「くるみ割り人形」(原作はホフマンの創作童話)の重要な登場人物であるドロツセルマイヤーは、主人公クララ(原作ではマリー)の「名づけ親」である(「代父」とか「洗礼立会い人」と訳されることもある)。一方、日本では、昔から、親以外では、主に、祖父が名づけ親になっていたようであり、「名づけ親」という語は、あまり使われない。したがって、金馬の速記を見ても、「そのむ

かしは子どもができませんと、名づけ親というものをこしらえたもので」と、わざわざ、冒頭で解説している。が、後の時代に受け継がれなかったことを見ると、結局、日本の聴衆は、この言葉になじまなかったのかも知れない。「死神」という言葉も、明治・大正時代にどれだけ一般的だったかは疑わしく、後述の大木篤夫作「蠟燭をつぐ話」では「死神」ではなく「死」と呼んでいるが、落語のタイトルは、現在では、定着している(註二)。

(落協)では、主人公の男は、いったん、ろうそくの灯を移すことに成功するが、ほっとしたはずみで、灯を吹き消してしまう(これは、比較的新しい型のようだ)。(明落)には、三遊亭円遊(初代)が演じたものが記されており(タイトルは「全快」)、ここでは、男は、自分の灯だけでなく、病人の灯も、新しいろうそくについて帰って来るという結末で、それで、病人が「全快」する(この型には「ほまれのないこもち」という題がつくこともあり、円遊が改作したものらしい(保田)(山本))。

このように、ヴァリエーションは多々あるが、基本パターンは、グリムと同じである。相違点の第一は、死神の位置についての設定、つまり、頭と足元の関係が、グリムと落語で

は全く逆になっている事だが、この逆転は、話の骨格には影響がなく、もともと、交換可能な設定である。相違点の第二は、「名づけ親」という設定である。グリムでは、死神は、主人公の名づけ親である事が明記されているが、落語では、「名づけ親」と何か関係がある事が示唆されてはいるものの、明示されない事が多い。だが、これも、話の骨格には影響のない設定である。(名人)によれば、明治四年の「文芸倶楽部」第一七巻五号に掲載された金馬の口演速記は「名づけ親」という題になっているという。こう見ると、落語「死神」はグリムから作られたように思われるが、多くの落語の解説書の記述は、意外なものである。

多くの解説書では、落語「死神」が三遊亭円朝(初代 一八三八―一九〇〇)によって、イタリアのオペラ「クリスピノー」から作られたと書かれているのである。ただ、タイトルを間違えて、「クリピスノ」、特に「靴直しクリピスノ」と書かれているものが多い。(今村四)には「これは元イタリアのオペラ『靴直しクリピスノ』を翻案したもので円朝の作」とあり、この増補改訂版たる(東大)では「明治中期にイタリアのオペラ『靴直しクリピスノ』からヒントを得てつくったはなしで、円朝作といわれる」、(今村) (今村二)では

五六

「是は伊太利のピアアヴェ作の喜歌劇『靴屋と妖精』又は『靴直しクリスピノ』の脚色である」となっている。(永井) (永井二)には、「この話はイタリアの歌劇『靴直しクリピスノ』を円朝が翻案したものだ」とあり、(山口)には、「原話がイタリアの歌劇『靴直しクリピスノ』にあるそうだ」とある。(保田)では、「三遊亭円朝が、イタリアのオペラからヒントを得て作ったといわれる」とあり、(山本)には、「グリム童話に『死神の名づけ親』があり、それをもとにイタリアで『クリスピノと名づけ親』という軽喜歌劇が作られた。これらが福地桜痴などから三遊亭円朝に伝えられ『死神』の創作に結びついたものと思われる」とある。(相澤)でも、グリムの「死神の名づけ親」に関連して、「イタリアでは『死神』を脚色したオペラが人気を博していた(中略)円朝がオペラの話聞き、これを落語に仕立てたものらしいという」とあり、(市川)もこれにしたがっている。(飯島)も、ほぼ同様であり、(落合)はこれにしたがっている。(富田)では、「ハイカラな感じがするのは、この落語のもとがイタリアのピアアヴェ作の喜歌劇『靴直しと妖精』だからだといわれている」とある。音楽書を調べると、(永竹)の、現在、流通している改定版には、オペラ「クリスピノー」に

関連して、落語「死神」はこのオペラから作られたという一文が付け加えられている(この記述は、同書の初版本にはない)。音楽之友社の「名曲解説全集」にも載っていないオペラであるが、一体、どのような作品なのだろうか。

オペラ「クリスピーノと名づけ親」

(永竹)によると、オペラ「クリスピーノ」は、ピアヴェの台本により、一八五〇年に、リッチ兄弟によって作曲され、同年、ヴェネツィアで初演されたという(同書では、「クリスピーノと死神」というタイトルになっている)。今日では、あまり知られていない作品であるが、イタリアのボンジョバンニ・レーベルから台本英訳付きのCDが発売されている事がわかり、入手して、英訳台本を読んでみた。原題は「Crispino e la Comare」、直訳すれば、「クリスピーノと名づけ親」であり、英訳タイトルは「Crispino and the Fairy」となっているが、あらすじは次の通りである。

貧しさのあまり井戸に身を投げようとした靴直しのクリスピーノの前に、彼の「名づけ親」を名乗る女が現れ、病人の生死の見分け方を教えて、彼に、医者になるよう勧める。

女が病人の近くにいたら助からず、いなければ助かるというのだ。クリスピーノは、たちまち名医となるが、外では浪費し、家ではけちだと、妻を嘆かせる。そこで、「名づけ親」は、彼を、人の命の灯がランプにともる地下の場所に連れて行って、自分が死神である事を明かし、彼に死を宣告する。ところが、地上で倒れているクリスピーノを助けて欲しいと神に祈る妻子の姿を鏡の中に見せられた彼が、彼等のもとに帰って、良き夫、良き父になると死神に約束すると、彼の魂は、地上にもどり、地上で倒れていた彼は、息を吹き返し、喜ぶ妻に、これからは心を入れ替えると約束する(英訳台本では「名づけ親」(Comare)を「Fairy」(妖精)と訳しているが、この部分に関しては、原語を尊重してあらすじを書いた。(永竹)にあるあらすじ紹介では、タイトルをふくめて「名づけ親」の語が全くでてこないが、もしかすると、英訳文を使用しているのかもしれない。また、(永竹)の紹介では、クリスピーノが生き返るきっかけが、彼の遺産の妻たちへの譲渡の約束であるかのように書かれているが、それは間違いである)。

以上が、オペラ「クリスピーノ」のあらすじであるが、ゲリムや落語の山場となっていた「病人の上下の置き換え」が

全くない。そのため、死神の位置の設定も必要なくなっていて、実際、それは欠落している。ラストも、少し「まじめ」なハッピーエンドになっていて、グリムや落語とは、かなり距離がある。これに比べると、グリムと落語とが互いに互いに近いという事がよくわかる。これを見ると、落語「死神」は、グリムから直接作られた可能性は高いと思われる一方、オペラ「クリスピーノ」から作られたとは考えにくい。特に、グリムから「クリスピーノ」を経て、落語が作られたとする、オペラの段階で、一度、大きくグリムから遠ざかった物語が、落語で、再び、(偶然に)グリムに近づいた事になり、それは、あまりにも不自然である。では、落語のルーツが「クリスピーノ」であるという説は、何を根拠に生まれたのだろうか。

「クリスピーノ」ルーツ説の出所

先に引用した「クリスピスノ」とまちがった表記のある記述のうち、もつとも古いものは、(今村四)の記述である。だが、残念ながら、この年代に活躍された人達は、仮にご存命の方がいても、極めてご高齢であり、直接取材するのは難し

い。また、先に引用した記述を見ても、今村氏の記述を除けば、「…という」「…そうだ」「…といわれる」「…と思われる」「…らしいという」と、どれも、根拠がはっきりせず、検証ができていない事を認める表現になっている。

(飯島)の中の飯島氏との対談の中で、六代目円生が語っているところによれば、落語「死神」を最初に高座にかけたのは、円朝の弟子の円左(初代 一八五二—一九〇九)であり、それが、二代目金馬、初代円遊らへ受け継がれていったという。彼らの師匠の初代円朝は、明治初期に活躍した名人であり、数々の創作を遺し、また、代表作「怪談牡丹燈籠」等、外国作品の翻案があり、中には、「錦の舞衣」(円朝二)のように、イタリアオペラと共通の題材もある(詳しくは後述)。そんな中で、グリムを知らずに、落語「死神」と似たイタリアオペラを見つけた人がいたら、「落語『死神』は円朝がオペラから作ったのだろう」と言い出しても、不思議は無いのではないだろうか。そして、それが、検証もされないまま、多くの文献に、そのまま、受け継がれていったのではないだろうか。オペラのタイトルが、「クリスピスノ」と間違っただけのまま受け継がれているのも、全く検証がされていない事の証拠である。

これに関して、(今村三)に興味深い記述がある。ここには、落語「死神」に関して、「この落語の原作は、イタリアのオペラ『靴直しと妖精』である。私は赤坂のローヤル館で、清水金太郎、静子夫妻と原信子の演じたのを見たことがある」と書かれているのだ。この記述を見ると、どうやら、「クリスピーノ」ルーツ説は今村氏の説のようであり、今村氏が、たまたま赤坂で上演された「クリスピーノ」を観たのが、この説を生むきっかけだったのではないかと思われる。おそらく、今村氏はグリムの「死神の名づけ親」をご存知なかったであろう。そして、こうして生まれた今村氏の説が、(今村四)に記され、それが、その時の誤植もろとも、多くの本に受け継がれていったのではないだろうか。落語「死神」がグリムの「死神の名づけ親」と同じ話だという指摘は、すでに、(永井)にあるが、今日にいたるまで、きちんとした検証がなされてこなかったようであり、(東大)(永井二)の記述も変わっておらず、(今村)(今村二)も、「クリスピーノ」に直つてはいるものの、内容は、(今村四)と変わっていない。

(山本)は、かなり調べているようであり、オペラのタイトルは正しく書かれており、また、落語のルーツとしては、

グリムそのものもあげているが、これも、根本的に、従来の「クリスピーノ」ルーツ説から抜け出ていない(福地桜痴については後述)。(市川)にいたっては、「クリスピーノ」については、(永竹)にあるあらずし紹介を参照して「内容が落語と違う」と気付いていながら「グリム童話も参考にした」と考えた方が理解できる」と述べるにとどまっている(山本)とほぼ同様)。

前記のあらずしでわかる通り、落語「死神」の要素で、「クリスピーノ」にあつてグリムにないものは何も無い。したがって、筆者は、現時点では、落語「死神」の成立に、オペラ「クリスピーノ」は全く関係がないのではないかと考えている。それよりも、落語「死神」は、グリムから直接作られた可能性の方がずっと高いと思われる。

なお、落語にしたのが円朝であるとする根拠は、二代目金馬の証言である(名人)に引用されている「講談倶楽部」第一五卷一三号、大正一四・一二の金馬の芸談(註三)。

オペラ「クリスピーノ」とグリムの「死神」のルーツ

ここで、いくつかの新たな疑問が発生するのだが、まず、

オペラ「クリスピーノ」とグリムの「死神の名づけ親」との関係を考えてみよう。両者の距離は、グリムと落語との距離に比べれば大きい。両者に共通点が多いのは確かであるから。年代から見れば、グリム童話集の初版は一八二二年、オペラ「クリスピーノ」は一八五〇年の作曲であるから、グリムからオペラが作られたようにも思えるが、両者が、共通のルーツを持つ並列関係の作品である可能性も考えられる。

(落合)にあるボルテとポリーフカの「グリム童話集への注解集」からの引用によると、一八二五年に、サルヴァトーレ・ファブリケージによって「医者と死神、或いは靴直し(出身)名医クリスピーノの五日間」という喜劇が作られているようであり、どうやら、これが、オペラ「クリスピーノ」の原作らしい。さらに、すでに、一五五〇年のイタリアのフォルテグエリイの短編小説の中で、名づけ親の女の死神が名づけ子を医者にする話があり、親夫婦を通じて、病人の生死の見分け方を教えることになっている。ここでは、死神が頭の

方にいたら助からず、足元にいれば助かるとなっている。これは、落語「死神」の設定と同じであるが、死神が女である点は、イタリア作品の特徴であり、これが、「クリスピーノ」のルーツである可能性が高いと思われる。

一方、同じ(落合)にドイツ語のまま引用されている「注解集」の別の記述を読んでみると、一五四七年には、ハンス・ザックスに「百姓と死神」という詩作品があり、ここでは、神様が、その不公平ゆえに、名づけ親を断られ、死神が選ばれるという設定がすでに出来あがっている。また、ヤーコプ・アイラーの「百姓と死神」では、死神が足元に立っていたら病人は助からないという設定もある。明らかに、グリムの「死神」は、この流れにのっており、イタリアでの流れとは独立した流れを作っているように思われる。つまり、一六世紀には、「死神メルヘン」が、すでに、ドイツとイタリアで、独立した流れを作っており、したがって、断言はできないものの、グリムと「クリスピーノ」は、共通のルーツを持つ、並列関係の作品である可能性が高いように思われる。

では、グリムと「クリスピーノ」の共通のルーツたる死神メルヘンは、どこで発生し、どのように伝播していったのだろうか。(落合)は、前述のフォルテグエリイの作品に目を

付けて、死神メルヘンをイタリア起源としているが、筆者には、そう断ずるための根拠は全く不十分であるように思われる。前述のように、ほかならぬ(落合)に引用されている記述の中にあるハンス・ザックスの作品は一五四七年であるし、さらに、ポリーファカの研究として(金成)に紹介されているところによると、一三三九年に記述されたアイスランドの昔話「王子と死神」では、「親方」が病人の足元か横にいれば病人を助けることができるが、枕元にいる場合には死が近いという設定がある(フォルテグエリイや落語と同じ設定)。また、死神が名づけ親になってくれるという話なら、すでに、一三三〇年にドイツにあったという。つまり、遅くとも、一四世紀に、すでに、死神メルヘンの原初的な形は成立していたわけであり、その発祥の地は、軽々に特定できるような問題ではない。そして、このモチーフが、伝播の過程で様々に変容、発展して、より複雑な物語が作られていったと見るべきであろう(グリム童話の中にも、死神や名づけ親の登場する似た話が他にある)。ただ、これまでに紹介した資料を見る限りでは、グリムの山場たる、病人の上下を置き換えて死神を欺くという発想や、名づけ親が選ばれる論理は、ドイツもしくは北欧で形成された可能性が高いように思われる。

なお、ドイツの死神が男なのに対して、イタリアでは女になっているのは、どうやら、両国の言語に原因があるらしい。すなわち、ドイツ語では、死または死神を表す「Tod」は文法的には男性名詞であり、「父(Vater)」等と同様に、男性を表す定冠詞を付けて「der Tod」と呼ばれるのに対して、イタリア語の「Morte」(死または死神)は女性名詞であり、女性を表す定冠詞をつけて「la Morte」と呼ばれるのである。(弘文)の「死神の名付け親」の項の解説によると、この伝承は、「死神」を意味する名詞が男性であるケルトなどの民族では死神は「名づけ父」として現れ、女性であるラテンなどの民族では「名づけ母」として現れるとのことである(これは(石井)にも引用されている)。で、落語「死神」に出てくる死神は男であり、明らかに、ドイツ系である。

ところで、このように、グリム以外にも、似た話がいくつもあるとなると、日本への伝播についても、グリム以外の経路がないか、一応、点検しておかねばならない。場合によっては、グリムとは別に、日本、そして、落語「死神」への経路が存在するかもしれないからだ。日本に、類似の民話が伝えられていないか。

実は、驚くべきことに、(関)に、山形県に伝わる民話と

して、「死神」が収録されており、その内容は、グリムとほとんど同じである。さらに、この情報を筆者のホームページに掲載したところ、TBS系のテレビアニメ「まんが日本昔ばなし」の制作スタッフの三善和彦氏からEメールをいただき、それによると、同番組で、平成元年十月に、日本の昔話として「死神」を放映しており、多分、(関)が出典であったと思うというのだ。「死神」は日本の民話なのだろうか。

「死神」は日本の民話か？

(関)には、収録した民話について、「明治末年から昭和五十一年末までに直接昔話の語り手から採集されたもの」とあり、「死神」に関しては、(武田)が出典であると記されている。が、そのテキストを見ると、医者がでたらめな「治療」をする際の呪文が、なんと、「アヤラカモクレン カンキョウチョウ テケレッツノペア」となっている。「カンキョウチョウ」というのは、環境庁のことだろうから、これは、明らかに、古くから伝わる民話の呪文ではなく、かなり新しい創作である。しかも、これは、現在の落語「死神」で語られる呪文とほとんど同じある。というのは、筆者が九九

年八月に銀座ガスホールで聴いた寄席では、三遊亭楽太郎がこの呪文を「アジャラカモクレン アルジェリア・・・」とやっていたのを記憶している。文献では、この呪文は、(円朝)や(名人) (三二) (富田) にはないが、(飯島)には「あじやらか…もくれん…あるじえりあ…てけれつつのばア」とあり、(落協)では、何と、「あじやらかニクソン毛沢東てけれつつのばア」となっている。「あじやらかもくれん……」の「……」の部分は、演者がその都度言葉を変え、それが、ひとつの冗談になっていたらしい。で、その落語が、山形県の「語り部」によって、「民話」のように語られ、上記の本に収録された可能性が極めて高いと思われる。(関二)には、武田正氏の「佐藤家の昔話」というエッセイが載っているが、それによると、武田氏の民話収集の中心のひとつは、山形県上山市榎下の佐藤孝一氏からの聴取らしく、「佐藤家に伝承された昔話は、現在までの調査ですでに五四九話を数える」と書かれている。そして、佐藤家が昔話伝承の社会的条件にめぐまれていたポイントとして、「宿場町として文化の流入が可能な場所に位置していたこと。『寄席ぶち』が若衆の中でおこなわれるといった状況」等があげられているが、これらは、そのまま、落語の流入の可能性にもつなが

るものである。

ただ、そう考えたとき、ひとつ気になるのは、例の死神の位置、すなわち、頭と足元の関係である。「山形民話」は、何と、落語ではなく、グリムと同じ(頭の方にいたら助かり、尻の方に現れたら助からない)なのだ。これは、ちよつと、不思議である。グリムの翻案として作られた落語が「民話化」した際に、頭と足元(尻の方)とが再逆転したのだろうか?だとすれば、その理由は何か?

すでに述べたように、基本的には、この設定は、逆にしても、話の骨格は壊れず、物語の本質にかかわる問題ではなく、それゆえ、語り継ぎの段階で、理由なく逆転しても不思議ではない。ただ、グリムと落語の場合には、設定にそれなりの理由があるように思われる点もあるので、ここに記しておく。というのは、グリムの初版では、医者か、治るべき病人を「治療」する際、薬を病人の足元に塗ることになっているので、死神が足元にいると都合が悪いのだ(決定版では、薬草を飲ませるだけである)。一方、落語では、時に、助からないはずの病人の顔を死神がにらみつけるシーンをおくことがあり(例えば、前述の九九年の楽太郎の高座)、この場合は、死神が枕元にいないと都合が悪い。このような事情で、

意図的に設定が変えられることもあるだろうが、先の「山形民話」の場合には、深い意味はないだろう。

ところで、ここで、述べておかなければならないのは、実は、この死神の位置の設定は、グリム童話の中でも、初版から決定版にいたるまで、一定していないということである。いままで紹介してきたのは、もつとも定着している決定版の設定であり、実は、第二版(二八一九年版)では、これと逆、つまり、落語と同じなのである(小沢)が第二版の邦訳である)。もしかすると、落語「死神」の土台となったのは、決定版ではなく、第二版なのかも知れない。ちなみに、初版の設定は、決定版と同じなので、この設定は、改訂の過程で、二度も逆転したことになる(初版の邦訳は(吉原)〈註四〉)。ついでに言うておくと、初版では、ろうそくをつごうとする結末はなく、その前で終わっている。

さらに、もうひとつ、何と、落語「死神」についても、死神の位置の設定に関して、通常のものとは違う、逆転ヴァージョンが存在するのだ、(今輔)に収録されている「死神」のテキストを見ると、死神が病人の枕元に座っていれば病人は助かり、すその方へ座っていたら助からないという設定になっている。これは、通常の落語「死神」やグリム第二版と

は逆で、グリム決定版と同じ設定である。こうなると、「山形民話」の設定も、もはや、疑問ではなくなる。「山形民話」は、落語の逆転ヴァージョンが民話化したものかもしれないし、また、このようにころころ逆転するものなら、民話化する際に再逆転したとしても、特異な現象とは言えなくなる。

いずれにしても、グリムから落語を経て「山形民話」となった死神メルヘンが、日本のメルヘンとしてテレビアニメにもなっていたわけである。「山形民話」が落語から作られたと考えられるという指摘は、すでに(石井)にあり、同書では、落語「死神」が民話化したとみられる事例は、他の土地でもあるとして実例もあげている。ただし、それらの「実例」のうち、筆者の考えでは、落語から作られたと断言できるのは、「山形民話」だけである。

なお、(関)には、「死神」に関して、「トルコ、インド」などでも記録されている。グリムの『名付親の死神』(四四)などがこの形式で、わが国では、落語『死神』として知られている。これらの伝承も落語に近い。この落語は明治中期、イタリアのオペラ『靴直しのリスピー』に基づいて円朝が創作したともいわれている」とあり、ついに、「リスピー」という誤記まで登場してしまったが、トルコ、インドにも類似

の話があるということになると、死神メルヘン発祥の地の特定は、ますます、一筋縄ではいかなくなる。そもそも、原初的な形であれば、複数の発生源がある可能性だってある。

(トム)によると、「死神の名付け親」の伝承は、「ヨーロツパからパレスチナまで広く知られている。やはりもつとも盛んに語られているのはバルチック、スカンジナビア、ドイツ地方である」との事であり、(弘文)の「死神の名付け親」の項の解説を見ると、世界には、「五六〇話以上の類話が記録されている」とのことだから、それらの分析は、とても、今、筆者の手におえるものではない。(トム)には、この方面の参考文献も記されているので、興味をお持ちの方は参照されるとよいだろう。今回、本稿では、これ以上、この問題には深入りしない事にする。なお、(金成)によると、グリム兄弟が、「死神の名付け親」の物語を誰から聞き取ったのかについても、諸説があるようであり、例えば、(吉原)と(鈴木)とでは、互いに異なる説が採用されている。

グリムの「死神」の日本への流入経路

さて、落語「死神」がグリムの「死神」から作られたとす

れば、グリムの「死神」の日本への流入経路が気になるところである。

まず、先にも触れた事だが、円朝には、海外作品の翻案がいくつかあるが、そのうち、「名人くらべ(錦の舞衣)」に關する、(永井)の解説を引用しておく、「『錦の舞衣』は円朝が福地桜痴よりフランスの劇作家サルドウ作の正史劇『ラ・トスカ』の物語を教えられ、これを翻案した作品である。原作の初演は一八八七年であるが、四年後の明治二四(一八九一)に、円朝は、既に高座にかけていた。同じ原作をプッチーニが作曲し、歌劇として初演したより十年も早かったわけである」との事。円朝の海外作品の受容の一端がうかがわれる(プッチーニのオペラ「トスカ」は非常に有名なので、円朝の作品はこれの翻案だと思っっている方がおられるかもしれないが、そうではないという事、つまり、福地桜痴が持ちこんだのはオペラではないという事を、ここで、頭に置いておいていただきたい)。ちなみに、この円朝作品では、原作の「女声歌手トスカ」が、「女狂言師お須賀」として登場し、まるで、日本のオリジナル作品のようである(テキストは(円朝二)に収録されている)。落語「死神」が、まるで、日本固有の物語のように語られている事に通じるも

のを感じるが、これが、円朝流の翻案なのだろうが、この流儀に、日本流の外国文化受容術の一端が現れていると言うこともできよう(註五)。では、円朝がグリム童話に触れた形跡はないのか。

(柳田)(大日)によると、一八八七年(明治二〇年)にグリム童話の初の日本語訳(翻案)が登場して以来、落語「死神」が成立したとされる明治三〇年ごろまでに、いくつかの作品の邦訳が登場しているようだが、「死神の名づけ親」の邦訳は見つからない。こうなると、出版された邦訳以外に、文人によって、口頭で円朝に伝えられた可能性も考えなくてはならない。この点で、注目したいのが、(高橋)の記述である。同書によると、一八六二年に、日本の遺欧使節の誰かがグリム(兄)を訪問したという事が、ドイツ側の記録にあり、一方、日本側の記録では、その使節には、文学に造詣のありそうな文化人としては、福沢諭吉と福地桜痴(ジャーナリスト、作家、本名は福地源一郎)が通訳として加わっていたようだ。このうち、福沢諭吉については、非常に詳しい「福翁自伝」を遺しているにもかかわらず、グリムのことは何も書かれていないとの事。これらのことから考えると、グリムと面会したのは福地桜痴である可能性が高いという事にな

る。しかも、前記のように、福地桜痴は、円朝に外国文学の情報を提供していた人物であるので、彼が、落語「死神」にかかわっている可能性が浮上してくる。

実は、ほぼ同様の推理は、すでに、(名人)の中の山本進氏の作品解題と(石井)にある。しかし、山本氏は、「クリスピーノ」ルーツ説を捨てていないため、「福地桜痴あたりが、グリムの原話も知り、イタリア・オペラも見聞したうえで、円朝に内容を教えたかと想像できなくもない」と述べ、グリムから「クリスピーノ」が作られ、これら二作から落語が作られたとしている。(石井)もほぼ同様であり、グリムから「クリスピーノ」が作られたとは書いていないが、この二作がともに落語のルーツであるとしている。膨大な情報を把握している山本氏や石井氏でさえ「クリスピーノ」を捨てられないのは、「クリスピーノ」ルーツ説があまりにも定着しすぎているためだろう。

(宇井)には、さきに述べた「クリスピーノ」のタイトルの誤記について、「福地桜痴あたりが外国でみたこのオペラを、『靴直しクリピスノ』とエケチット式に転倒しておぼえて帰り、それを通説屋が丸のみに伝承してきたのだろう」と書かれているが、この推測は、どうやら当たっていない。(今

村三)では、内容の紹介の中で、一応、主人公の名は「クリスピーノ」と正しく書かれており、(今村)(今村二)でも「クリスピーノ」となっているので、(今村四)が誤植であり、以後、これに基づいて書かれたものが、軒並み誤記を繰り返したというのが真相のように思われる。むしろ、疑うべきは、「クリスピーノ」ルーツ説そのものである。福地桜痴がかかわっているとすれば、彼が円朝に伝えたのは、あくまでグリム童話であって、「クリスピーノ」は全く関係ないのではないかと筆者は考えているのだが、もちろん、福地桜痴が「クリスピーノ」を知らなかったという保証もない。

現時点では、グリムの「死神の名づけ親」の日本への流入経路は不明と言わざるを得ない。が、円朝には、外国文学に詳しい文化人との交流があったようなので、円朝自身に語学力がなくても、情報収集の可能な環境は持っていたことになり、福地桜痴は、関与した人物の候補であると言える。そして、いずれにしても、「死神の名づけ親」は、落語化によつて、実質的に、日本で最初に普及したグリム童話であったと言つてよいだろう。

大木篤夫作 「蠟燭をつぐ話」

ところで、日本における死神メルヘンのヴァリエーションという事になると、(坪田)に、大木篤夫作「蠟燭をつぐ話」という短編が収録されており、一九二五年に「赤い鳥」に発表されたものようだが、あらずじは次の通りである。

貧しい小作人のマルチンに子どもが生まれた時、お祝いを申し出た死神の女が、マルチンをあなぐらの奥の人の命の灯がろうそくにともる場所に連れていく。そこで、自分の命のろうそくがまもなく燃え尽きることを知ったマルチンは、別の長いろうそくを折って、自分のろうそくについて帰ってくる。そのマルチンに、死神は、病人の生死の運命を教え、そのおかげで、マルチンは名医となる。死神が病人の足元にいたら病人は助かり、枕もとにいたら助からないというのだ。一度、マルチンは、死ぬべき病人の上下を置き換えて病人を助けたが、全快はさせられず、結局、病人はまもなく死んだ。やがて、マルチンは、年を取って、生きているのが退屈になったが、彼が死ぬより先に、子どもが病気になるって、死にそうになる。死神は、マルチンがかつて、あなぐらで、自分のろうそくについだのが、子どものろうそくだった事を教え、マ

ルチンは、死神に頼んで、もう一度、あなぐらに連れていってもらい、自分の長くなつたらろうそくを折って、消えそうになっている子どものろうそくに継ぎ足して帰ってくる。マルチンは、子どもが元気になったのを見届けて、息絶える。

これが、あらずじだが、グリムや落語と違って、ナンセンステールとしてのおもしろさは全くない。むしろ、命のろうそくというモチーフを用いて、自然の寿命に逆らうことの愚かさを示す寓話のような物語になっている。死神の位置の設定は、ここでは、あまり重要ではないが、一応、落語や、グリムの第二版と同じである。名づけ親という設定はないが、実質的には、死神は、主人公マルチンの子どもの名づけ親のようなものである。もしかしたら、この作品は、落語「死神」を土台にしたものかもしれないが、もちろん、グリムから直接作られた可能性も否定できない。間接か直接かはわからないが、いずれにしても、これも、グリムの「死神の名づけ親」と同じメルヘンから作られている事は明らかであり、広い意味では、このメルヘンのひとつのヴァリエーションと言うことも可能であろう。ただ、死神の性別という点では、大木作品は、ドイツ系ではなく、イタリア系である。では、たとえば、大木作品こそ、イタリアのオペラ「クリスピーノ」から

作られたという可能性はどうだろう。残念ながら、オペラ「クリスピーノ」には、病人の上下を置き換えるシーンなど、まるでない。したがって、少なくとも、大木作品が、オペラ「クリスピーノ」だけを参照して作られたと考えるのは無理である。しかし、では、これが、「クリスピーノ」とグリム、もしくは、「クリスピーノ」と落語の両方を参考にして作られているという可能性はどうか。それなら、もちろん、おおいにありうる事である。ダブルルーツ説は、この大木作品にあてはめてこそ、信憑性が出てくる考えであろう。

なお、落語「死神」からは、さらに、新しいオペラやミュージカルも作られたようであり(市川)、このメルヘンの伝播の多様性の一端を示しているようだ。

結び

以上、本稿では、死神のメルヘン、特に、落語「死神」の成立過程をはじめとして、死神メルヘンの様々なヴァリエーションどうしの関係について、従来の説の問題点を述べてきた。特に、落語「死神」がオペラ「クリスピーノ」から作られたという説が間違いである可能性が高いことは、改めて強

調しておきたい。今後、落語「死神」の解説を書かれる方には、従来の「クリスピーノ」ルーツ説と、本稿で提唱したグリム単独ルーツ説、それに山本氏や石井氏等のダブルルーツ説(註六)のうち、どれが正しいのか、是非、吟味していただきたい。

(名人) (石井) (今村三) (今輔) は山本進氏が教えてくださった。山本氏からは、直接お電話をいただき、助言をいただいた。「クリスピーノ」に関しては、「関係ないという事の証明は難しい」と話しておられた。全く、その通りであり、それが、「クリスピーノ」ルーツ説が今まで生き延びてきた原因であろう。加えて、これが、速記者として、落語家から多くの情報を直接聞ける立場にあつた今村信雄氏の記述であつたことも大きいようだ。

本稿の公開によって、新たな情報、意見が寄せられる事を期待している。また、その場合には、筆者のホームページ(童話作家・北村正裕の部屋)で、随時、最新情報を掲載する予定である。

<http://member.nifty.ne.jp/kitamura-masahiro/>

註

〈註一〉初版では、神様の後、すぐに死神が現れるが、決定版では、神様の次に、悪魔が現れ、これは、人間をだましたり、そのおかしさたりするという理由で断られ、三番目に死神が現れる。

〈註二〉(落合)には、国文学者の田中優子氏から「落語で言う死神という概念は元来日本にはない」と口頭で指摘された旨が書かれている。

〈註三〉(今輔)によると、今輔は、落語「死神」を二代目金馬から受け継いだとのことだが、「このお話は円朝師匠のお作か、それとも昔からありましたものを口演したのか、先代金馬師匠が前座の頃、たった一度ききましたものを思出して、上演したのだそうでございます」と書かれており、この今輔の記述が正しいとすれば、死神を「高座で演りだしたのは、初代の円左さんですね」という六代目円生の発言(飯島)との整合性が問題である。もし、両方とも正しいとすれば、最初に、円左が演じ、後から、作者たる師匠の円朝が自ら演じたという事になるが、ほんとうに円朝が自ら演じていたのであれば、それが、どのようなものだったのか、二代目金馬の口演速記の内容と比べてどうだったのか、おおいに気になるところである。が、今のところ、それを示す資料は、円左の口演速記ともども、発見されていないようである。

〈註四〉(落合)は、初版と決定版を比べて、わざわざ、グリムが「死神を足元に立たせ続けた」と書いているが、これは、第二版を全く考慮にいられていないものと思われる。

〈註五〉外国の物語を、まるで、日本固有の物語であるかのように翻案する流儀は、円朝の翻案に限ったことではない。例えば、かの有名な「シンデレラ(サンドリオン)」という名は、「灰かぶり」とか「すすだらけ」という意味であることはよく知られているが、(鈴木)に紹介されているところによると、明治二〇年の「シンデレラ」の桐南居士による邦訳(翻案)では、この「シンデレラ」が、なんと、「おすす」という名前で登場している。だが、物語の性質上、この主人公には、

やはり、どうしても、靴をはいてもらわねばならず、かくして、「おすす」は、着物に靴という格好で舞踏会に出かけるという奇妙な事になるのである。

〈註六〉山本氏自身は、さらに、河竹黙阿弥作の歌舞伎狂言「盲長屋梅加賀鶯(めくらながやうめかがとび)」で五代目菊五郎が演じた死神に、円朝が触発された可能性を指摘していて、これを含めて、トリプルルーツであると話しておられた。詳しくは、(名人)の三三五ページ。なお、〈註二〉との関連で言うと、この歌舞伎狂言の存在から、日本でも、この時点で、すでに、歌舞伎の中では、「死神」が登場していたことがわかる。

参考文献

論文

(落合) 落合直文「グリムのメルヘンと円生の落語」(「日本大学農獣医学部一般教養研究紀要 三二」一九九六)

(市川) 市川久美子「死神」(「語りの世界 二九」一九九九)

単行本

(金田) 金田鬼一訳「完訳 グリム童話集(二)」(岩波文庫 一九七九)

(小沢) 小沢俊夫訳「完訳 グリム童話集(一)」(ぎょうせい 一九八五)

(吉原) 吉原高志・吉原素子訳「初版グリム童話集(二)」(白水社 一九九七)

(今村) 今村信雄編「落語全集(中巻)」(金園社 一九六一)

(今村) 今村信雄編「落語選集(二巻)」(西澤道書舗 一九六六)

(富田) 富田宏編「古典落語全集」(金園社 一九六九)

(三一) 「古典落語大系 第二巻」(三一書房 一九六九)

(落協) 落語協会編「古典落語(八)」(角川文庫 一九七四)

(円朝) 「三遊亭円朝全集 第七巻」(角川書店 一九七五)

(飯島) 飯島友治編「円生全集 第七巻」(青蛙房 一九六二)

- (明落) 「明治大正落語集成 第六巻」(講談社 一九八〇)
 (名人) 「人名名演 落語全集 第五巻 大正編」(立風書房 一九八二)
 (武田) 武田正編「出羽の笑いばなし」(一声社 一九七四)
 (関) 関敬吾編「日本昔話大成 七」(角川書店 一九七九)
 (関二) 関、野村、大島編「日本昔話大成 一二」(角川書店 一九七九)
 (坪田) 坪田譲治編「赤い鳥傑作選」(新潮文庫 一九五五)
 (円朝二) 「円朝全集 巻の七」(世界文庫 一九六三)
 (柳田) 柳田泉「明治初期の翻訳文学」(松柏館書店 一九三五)
 (高橋) 高橋健二「グリム兄弟・童話と生涯」(小学館 一九八四)
 (大日) 日本児童文学学会編「グリム童話研究」(大日本図書 一九八九)
 (鈴木) 鈴木晶「グリム童話」(講談社現代新書 一九九二)
 (相澤) 相澤博「グリムの笑い話」(NTT出版 一九九二)
 (金成) 金成陽一「グリム童話のなかの呪われた話」(大和書房 一九九六)
 (今村三) 今村信雄「落語の世界」(青蛙房 一九五六)
 (今村四) 今村信雄「落語事典」(青蛙房 一九五七)
 (東大) 東大落語会編「増補 落語事典」(青蛙房 第七版一九七九 初版は一九六九)
 (今輔) 古今亭今輔「今輔の落語」(土屋書店 一九五七)
 (永井) 永井啓夫「三遊亭円朝」(青蛙房 一九六二)
 (永井二) 永井啓夫「新版 三遊亭円朝」(青蛙房 一九九八)
 (宇井) 宇井無愁「落語のふるさと」(朝日新聞社 一九七八)
 (保田) 保田武宏「ライブラリー 落語事典(東京編)」(弘文出版 一九八二)
 (山口) 山口龍之介「落語の四季」(騒人社 一九九〇)
 (山本) 山本進編「落語ハンドブック」(三省堂 一九九六)
 (石井) 石井明「落語病草子」(創樹社 一九九九)
 (トム) S・トンブソン(荒木、石原訳)「民間説話(上)」(社会思想社 一九七七)
- (弘文) 「日本昔話事典」(弘文堂 一九七七)
 (永竹) 永竹由幸「オペラ名曲百科 上」(音楽之友社 一九八〇)
 (CD) "Crispino e la Comare" (Bongiovanni GB 2095/96-2 台本英訳付き)